

市民と創造する演劇

グッバイ フランケン シュタイン

穂の国の怪物たち

Goodbye Frankenstein
2020

報告書



市民と創造する演劇
穂の国の怪物たち
グッバイ
フランケンシュタイン
2020 3.7-8日

● スタッフ

脚本・演出—吉田小夏〔青☆組〕

出演・演出補—大西玲子〔青☆組〕

細身慎之介〔CAVA〕

舞台美術—濱崎賢二

衣装—竹内陽子

照明—伊藤泰行〔真昼〕

音響—佐藤こうじ

〔Speak Sound〕

音響操作—今里愛

〔株式会社エエフシ〕

舞台監督—安田美知子

舞台監督助手—村西恵

演出助手—日沖和嘉子

技術監督—高瀬洋★

大道具製作—片桐健★

記録写真—伊藤華織

宣伝美術—共田慎性★

中川裕樹★

※〔株式会社エエフシ〕

記録撮影—田中博之

制作—矢作勝義★

吉川剛史★

大橋玲★

伴朱音★

石田晶子★

★〔穂の国とよはし芸術劇場〕

票券—伊藤和美

伊藤和美

かずきこーた

CAVA

協力—青☆組

制作助手—岡由里子

主催—豊橋市

（公財）豊橋文化振興財団

企画制作—穂の国とよはし

芸術劇場PLAT

2019年度

文化庁文化芸術

創造拠点形成事業



私たちの虹の橋

脚本・演出 吉田小夏(青☆組)



撮影・金子愛帆

2020年3月8日、
雨の日曜日。

『グッバイ・フランケンシュタイン』

「穂の国の怪物たち」は、温かく鳴り響く拍手に包まれて、無事に幕を閉じた。

コロナウイルスの影響で、公演中止のニュースが飛び交う緊張感のある時期だった。

制作チームがあらゆる対策に手を尽くした上での上演。公演規模の縮小で、客席から見守るお客様数は、決して多くはなかった。

けれど私には、その日の拍手が、満場の客席から響くものように、熱く力強いものに聞こえた。舞台上にいる演者のみんなにも、袖にいたスタッフのみんなにも、拍手の音は力強く届いていたに違いない。観客はその作品の最後の参加者、という言い方があるが、緊張感の中で足を運んでくれたお客様の「この作品を、確かに一緒に体験しました。」という熱い心を、演劇への愛を、受け取った瞬間だった。

公演から2か月以上経った今でも、目を閉じると、あの日の拍手の温度や、カーテンコールで演者達の笑顔が、鮮やかにこの胸に蘇る。芝居の終幕近く、舞台上に照明で美しい虹が現れる演出があった。

七色の光の中で、19名の出演者が舞台上に一列に並び、客席にいるお客様に直接語りかける

場面だ。物語の中にある、フィクションの部分とドキュメントの部分の架け橋になる大切な台詞の語り。19名の、言葉のバトン。

ひとりひとりが、自信を持ってしっかりと客席と向き合い、確かにそこに居た。

作家の書いたセリフを、自分の言葉として劇場に放つ声も、虹の照明に負けずにキラキラ輝いていた瞳も、アーティストのそれだった。そして、19名ひとり残らず全員が、それぞれの輝き方でそれを成し遂げていたことに何より感動した。

思い返せば、キャストイングの時のオーディションの日も、彼らはこの板の上に立っていた。あの日の挑戦の輝きも美しくなかったけれど、そこからコツと練習を重ね、自分の中の伸びしろを最大限まで持ち上げた彼らの堂々たる姿は本当に見事なものだった。

本番を見届けながら「ああ、この瞬間の舞台上の風景を、私は生涯忘れないだろう。」と感じる瞬間に出会えた時、いつも胸の奥が震える。そして作品が稽古場から羽ばたき、劇場でしか成しえない昇華をしたことを感じる。「ああ演劇が生まれた!」と思うのは、こんな時だ。そしてその気持ちは「この作品は、ちゃんと作品になった。成功した。」という安堵に変わる。本作でその安堵を感じられたことは、市民と創造する演劇だからこそなおさら嬉しかった。

市民劇というものに、演出家としてはじめて参加したのは、2012年。世田谷パブリックシアターが主催した企画で、今回のように物語性の

の高い作品ではなく、ドキュメンタリーとしての要素が強い取材劇の作品だった。

しかしそれは、長い道のりを経て、今回の創作にまで結び付く、私の市民劇創作の原点としての一歩だったのだと、本作を創りながらここまでの道のりを想った。

市井の人と真剣に演劇を創る、と言う点においては、どんなスタイルの市民劇でも、根底に通じるものは同じように思う。

2012年当時から、プロの俳優と、市民俳優との、アーティストとしての違いはなんだろう? ということを真剣に考えていた。

その時想像したのは、料理やお菓子のことだった。

10回なら10回、30回なら30回、どんな季節のどんな天候の日であっても、毎日同じ美味しさをのケーキをお客様に届けることが出来るのが、職業としての菓子職人だろう。

でも例えば、その年のたった一回のお誕生日に、家庭用のオーブンで家族の為に奇跡のように美味しいケーキを作る事が出来る人というのは、確かにいる。

プロのパティシエでなくても、びっくりするほど美味しいケーキを焼くことが出来る可能性はあるのだ。でも、その家庭用オーブンのびっくりするほど美味しいケーキは、毎日同じ美味しさになるとは限らないかもしれない。

市民俳優に、10回の本番を同じクオリティで演じることを要求するのはなかなか難しいと思う。それには、年数をかけた訓練と技術が

必要だから。

けれど、1回、もしくは2回の本番ならば、奇跡のような輝かしい芝居を見せてくれる人は、確かにいる。

アーティストとしての違いは、そこにあるのではないかと、今も思う。

だから、手作りのケーキが、お店のケーキ以上に胸を打つ味になる可能性があるように、舞台上で輝くその瞬間、彼らは間違いなく本物のアーティストだ。

私はそこに、市民劇の可能性と、他には無い深い魅力を感じている。

今回の作品では特に、古典のゴシックホラーを原作にしたことで、日常の等身大な体と世界観のままでは板の上に立てないという、大きな課題があった。それは私自身にとっても、初めての挑戦だった。

祈るように迎えた、初日と千秋楽。あの日、虹の橋の光の中に立っていた19名の輝きは、本物だった。

この作品は、公共ホールの持つ創造性と、市民劇の魅力とを、私に改めて教えてくれたと思う。最後に、この作品の完成と上演を成しえた、この劇場の底力に、もう一度拍手を贈りたい。

冬の終わり、 カイブツは煌いた

出演・演出補 大西玲子(青☆組)



「暮らしと芸術・伝統文化が寄り添う街」。これが、豊橋を訪れた第一印象です。ひと月以上の滞在で、これは益々色濃く刻まれてゆきました。

昨年、2019年の夏から続いた濃厚な企画でした。数々の光景が五感全てで鮮明に思い出されます。私は、市民劇と呼ばれるもので観劇料金をいただく公演を打つのは、あらゆるものの優先順位や方向性、参加者の思考を揃えるのもとても難しいことではないかと想像していました。蓋を開けたら、この地で暮らす人々の、人間のあたたかさや実直さ、それに支えられた毎日でした。毎年違うテキストの作品と向き合うのは大変です。今回もきつとこれまでと全く違う「Good」に向かっていたことでしょうか。出演、裏方と異なる役割を担った市民参加者が、まさに表裏一体となって挑む姿が美しかったです。劇場の方々をはじめ、市民メンバーもみなさん持っていた、心意気と情熱、向上心、抜群の笑顔、等々の前向きなエネルギーが、豊橋を吹き抜ける風のように、作品を力強く押し上げてくださいました。

私が、演劇の専門家として、多様な背景を持つ市民の中に入り、共演しながら創作するとき目指したのは、それぞれの責任を背負い、フラットな関係でお互いを尊重し、尊敬し、認め合う場を保つ、ということでした。無意

出演・演出補 細身慎之介(CAVA)



生まれてからこれまで 梅の花を真剣に観察することは なかった。

レジデンスの部屋から見

える梅の木はたくさんの花を

咲かせていた。近くの公園に行けば日本でも有数の梅祭りややっていて、稽古場に向かう前には何度か足を運んでセリフを覚えたりその日の稽古の段取りなんかを想像したりした。東京ではゆっくり取れる時間ではない。正しい答えは出ないけれど本番という時間がやってくるのも舞台の醍醐味だ。この演技で良いのか? やってきたことは正しかったのか? でも、とりあえず、今のところ、出している「正解」というものを信じて披露するしかない。今回の市民劇の上演中感じたのは、キャストみんなの信じる心だった。本番の日を迎えるまでになんとか「正解」を出そうとした自分と今舞台上で演じている自分を信じる心。劇場の隅々までそれが満ちた作品だった。

本番を終えて帰京する頃には少しずつ花を散らせた梅の木も、あるいはそんな心持だったのかも知れない。こういう色の花を咲かせようかと思うんだけど果たして良いのかな? 時期は? 満開の期間はどれくらい? 「正解」じゃないかもしれないけどとりあえず咲かせよう、冬の間しっかりと考えてきた花を。来年はもししたら花を咲かせることができないうちかもしれないから、というように。

識的にもヒエラルキーが生み出す問題は、年齢、職業を問わず様々な場面で起こり、悩ましいニュースが絶えません。私だけが目指すのでは難しいところを、幸い、今回は健康的な場に向かって全員で歩みを進めることができ、非常に励まされましたし、勉強になりました。また、上演について、各地でなされたどんな決断にも断腸の思いと正義と覚悟が伴う中、今公演はお客様に同空間で観ていただくことにも、感謝が尽きません。どれも、このPLATという劇場が、人々の暮らしの中にあるからこそその結果だと感じます。市民が生き生きと活躍する企画が、今後も続くこと、そして是非また一緒にさせていただけることを、心から願います。

あるかを知ってもらえるか。

稽古も佳境に入ってくる頃には



グッバイ
フランケンシュタイン
種々の怪物たち



種々の語り部達

相関図

出演者紹介

フランケンシュタイン博士によって造られた

カイン
グッツ

森の鳥たち

森に住む鳥の家族

『フランケンシュタイン』は、イギリスの作家メアリー・シェリーが若干18歳の時に書いた物語です。ゴシックホラーとして名高いこの小説を書いたのが、道ならぬ恋に身を焦がす若い女性だったことを初めて知った時、この作品に眠る新しい可能性を感じました。原作に登場する怪物は、最初から最後まで、名前がありません。今回の作劇では、出演者達と一緒に、自分だけの怪物の名前を探るところから創作をはじめました。生まれ落ち世界と出会う中で、コンプレックスや孤独、葛藤。それは人間の悩みそのものとも言えるのではないのでしょうか？ その普遍的な痛みを、様々な怪物の視点を通して見つけ、原作とは違う希望のある終幕を、祈るように探してみたいと思っています。

脚本・演出 吉田小夏
※チラシ裏面より抜粋

フランケンシュタイン家の人々

若き天才博士と彼をとり巻く人々



婚約者
エリザベス



ヴィクター
フランケンシュタイン
博士



乳母
ジャンヌ

佐々木宏子



板坂重信



森川理文



駒沢真司



玉越渉太

森の一家

森の奥に住む貧しい一家



祖母
クレア



母
サラ



姉の夫
ハンス



弟
ペーター



姉
マリー



花売り女

市民スタッフ



古田久子



竹下智江子



柴田公代



江上定子



赤石さくら



松本龍門



中村剛大



鈴木節子



神山莉沙



市野ゆみ



神谷恵子



中村里帆



祖父江和之



真田信三



岩倉郁子



父鳥



母鳥



姉鳥



爺鳥



妹桃鳥



妹紅鳥

伊藤早紀

牧田直佳

長藤粧子

柿田美紅

細身慎之介

上松義和

鳥田武

石川つや子

2019年 5月7日[火]	募集告知開始
7月1日[月]	オーディション申込締切
7月19日[金] 20日[土] 21日[日]	第一次オーディション 第二次オーディション 出演者確定
9月21日[土] 11月30日[土] 12月1日[日]	演技ワークショップ 出演者ワークショップ
12月3日[火] 27日[金]	チラシ・ポスター完成 スタッフ打ち合わせ
2020年 1月5日[日] 1月7日[火]~13日[月・祝] 18日[土]	チケット会員先行発売開始 第一次稽古 チケット一般発売開始
2月1日[土]~4日[火] 7日[金]~28日[金] 2月29日[土]~3月5日[木]	自主稽古 第二次稽古 仕込み 劇場リハーサル ゲネプロ
3月7日[土] 8日[日]	【本番】 ◆14時30分・入場者158名 ◆14時30分・入場者103名 ●総入場者数261名
7月26日[日]	本番映像上映会



第一次稽古
● 1月7日(火) — 1月13日(月祝)

6年目となる「市民と創造する演劇」は、主ホールで公演を行う中では最少人数となる17名の市民出演者とのクリエイションとなった。今作はメアリー・シェリーの小説「フランケンシュタイン」を原作に、脚本・演出を務めた吉田小夏さんにより出演者それぞれに役を当て書きされた戯曲が書き下ろされた。

第一次稽古では、完成した脚本を基に読み合わせが進んだ。登場人物それぞれの立場や関係性からなる発話方法や、言葉を声としてどのように表出するかを、吉田さんから細やかに演出がつけられていく。最終日には通し読み合わせを行い、演出家の求めるイメージや表現方法を出演者全員で共有していった。

第二次稽古
1 週目

● 2月7日(金) — 2月10日(月)

立ち稽古を中心に、読み合わせで共有した作品のイメージを立ち上げていく。オープニングでは、出演者全員の動きで1体の大きな怪物にみせるムービングを取り入れられ、休憩時間中も出演者同士で動きを確認し合いながらシーンが作られていった。

第二次稽古
● 2月12日(水) — 2月16日(日)

舞台美術の濱崎賢二さんから舞台デザイナーの説明や、舞台監督の安田美知子さんにより舞台面の説明が行われた。市民スタッフは舞台美術で使用される不織布の染色作業や、舞台転換の要となる可動式パネルの色塗り作業を行った。最大10mの長さがある不織布を、一枚一枚染めていき、主ホールの舞台上で乾かしていく。公演を宣伝するPOPは市民スタッフがそれぞれアイデアを出し合い、ポスターから飛び出すような立体的なPOPが出来上がった。

第二次稽古
2 週目

● 2月25日(火) — 3月1日(日)

第一次稽古で練習した「ヴォカリーズ」の歌唱シーンの稽古が行われた。立ち位置やソノバト、身振りなどが加えられ、歌が作品に落とし込まれていく。

16日には衣装パレードを実施。竹内陽子さんの製作した衣装を出演者が試着し、全体的なデザインやチェックやサイズの調整を行った。竹内さんのサポートや、稽古で使用する仮小道具づくり、台詞を忘れた出演者にすかさず台詞を伝えるプロンプターなど市民スタッフの作業は多岐にわたった。18日にすべてのシーンの立ち稽古を終わらせるべく、急ピッチで稽古が進んでいく。

第二次稽古
3 週目

● 2月18日(火) — 2月23日(日)

18日にすべての立ち稽古が終わり、各シーンの演技面の重点的な稽古が行われた。市民スタッフは、今作で印象的なモチーフである「ツギハギ」を衣装に縫い付ける作業が続く。22日には約10名の市民スタッフが見学する中、はじめて通し稽古を行った。シーンごとの切り替えや動線をはじめ、全体を通すことで様々な課題が見えた。

第二次稽古
4 週目

● 2月25日(火) — 3月1日(日)

衣装を着用し、本番に近い状態で通し稽古が繰り返され、市民スタッフも小道具の色塗りや、大道具のヤスリがけ、衣装の管理など公演に向け様々な準備に追われるようになった。本番に向け集中力が増していき、一方で、新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大に伴い、遠方から稽古に通う出演者の中から不安の声が聞こえはじめ、緊張感も日に日に増していき、注意喚起や手指の消毒などを行いつつ稽古は続行したが、自粛ムードが漂う中、例年通りの上演は難しく上演の可否が迫られる状況となっていた。無観客での映像収録を主とした上演や公演中止の可能性も浮上したが、29日に公演規模を縮小して上演することを決断。稽古場は舞台セットが組まれた主ホール舞台上へと移動し、音響・照明が入った状態でチェックが進んだ。

第二次稽古
5 週目

● 3月2日(月) — 3月6日(日)

近隣の市でのコロナウイルス発症者が出る中、公演の準備が粛々と進む。音響・照明との調整作業を行う。場当たりりと、5日・6日には本番同様に行う「ゲネプロ」を行った。公演への不安を感じながらも、真剣な表情で舞台に立つ出演者と、転じて楽屋では出演者・市民スタッフそれぞれが励ましあい、笑いあうようなやかな雰囲気が印象的だった。

今回の公演では、新たな試みである聴覚に障害があり観劇にハードルを感じる方向けの字幕表示タブレットを導入し、タブレットの字幕文字作成操作を市民スタッフが行った。字幕の出るタイミングや演出に合わせたタブレットの暗転方法など、公演ギリギリまで調整が行われた。キャスト・スタッフ共に追い込みにかかる中、本番当日まで作品の完成度を高める作業が続いた。





グッバイ
フランケンシュタイン

市民と創造する演劇
穂の国の怪物たち
Goodbye
Frankenstein

スタッフワーク

出演するだけが魅力じゃないのが『市民と創造する演劇』
今作では15名の市民スタッフがこの作品を支えました。劇場スタッフや現場で活躍するプロスタッフと共に、それぞれの得意分野を活かしながら、多岐にわたる仕事を担当しました。

舞台美術

大道具

舞台美術・濱崎賢二さんのもと、舞台上に吊るす不織布の染色作業や、パネル・小道具の塗装を行った。作品を通して統一感が出るよう、色ムラや汚しをだす工夫がされた。



衣装

衣装・竹内陽子さんに教わりながら、衣装のツギハギを縫ったり、ポケットを作る作業をした。衣装の洗濯やアイロンがけといった衣装管理も担当した。



記録映像

稽古場の様子を写真で記録したり、館内で流す広報動画の撮影・編集を行った。



照明

照明・伊藤泰行さんの指導のもと、小道具で使用するランタンに照明を仕込んだ。明るさや色、落とすも大丈夫なように補強するなど様々な工夫が加えられた。



音響

音響・佐藤こうじさん、音響操作・今里愛さんより、安全かつ正確に機材を使用する本番に使用するワイヤレスマイクの取り付け講座が行われた。



演出部(舞台袖)

舞台監督・安田美知子さんのもと、立ち位置に目印をつけるパミリや、稽古中の仮小道具の作成をした。公演当日には、舞台袖で小道具の管理を行った。



ホワイエ・場内スタッフ

コロナウイルス感染拡大防止のため、パンフレットの手渡しはせず、アルコール除菌を徹底するなど、安心安全に観劇ができるよう会場案内を行った。



掃除

稽古終了後にモップがけや小屋入り後は舞台袖の掃除機がけを行うなど、稽古場を清潔に保てるようサポートをした。



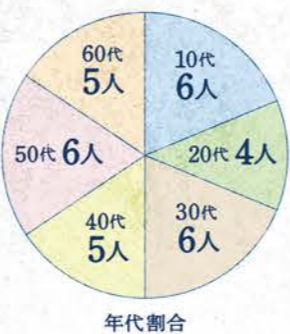
広報

より多くの人に興味を持ってもらえるよう、POPや広報動画、SNSでの宣伝を行った。



出演者17名/スタッフ15名

(内スタッフ1名未記入)



1 7月のワークショップ

集計結果 1

※キャストのみ

	とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	7	10	0	0	0

- ワークショップで学んだことが、実際のお芝居に活かされたので良かった。
- 演出家の雰囲気や肌で感じられたのはよかったです。
- 合否に関わらず、良い経験に繋がりが、公演が楽しみにするきっかけになったと思います。
- 戯曲を読んで、自分のくせや欠点を教えてもらい、自分のくせに初めて気づくことができ、すごく学びになりました。
- とても内容の濃いワークショップに参加できたようなやりきった感を得たオーディションだった。特に戯曲の読み合わせでひとりひとり丁寧な指導を受けて、ここまで真摯に対応して貰え

2 9月~12月のワークショップ

● たら悔いはないと思った。
● 演技の審査だけでなく、ダンスの審査もあり、私はダンスが苦手分野でしたが上手くなくてもいいと言われ、肩の力を抜いて自分らしく踊ることができました。

- すずきこーたさんのWSは、自然に導かれ、公演の内容にも繋がっていました。小夏さんが一緒に参加して下さったのも良かったです。
- 自分のことについて紹介したり、自分の中の怪物を実際に絵に描いて見せたり、周りの人とコミュニケーションをとるものが増えて楽しかったです。コミュニケーションをとったことで、だいぶこの座組に身体が慣れていった感じがしました。
- 9月のワークショップは頭を働かせすぎて疲

集計結果 2

※キャストのみ

	とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
日時	4	9	4	0	0
回数	3	9	5	0	0
内容	8	6	3	0	0

● 伊藤和美さんの発声ワークショップは姿勢や声の出し方など、声を出すための大事なことを多く学べました。「ヴォカリーズ」もこの時初めて歌い、高い音が全く出なかったのですが、発声ワークショップをやった効果で第一次稽古・第二次稽古では高い音も出るようになりました。
● 楽譜が読める人と読めない人の差が気になりました。もっとフォロワーがあってもいいと思う。
● どちらのワークショップも自分には無いと思つたものが自分の中にある事を気付かせてくれたワークショップでした。

3 第一次稽古について

- 終了時間が21時だったので助かりました。毎日の稽古には睡眠が大切なので。
- 台本を受け取るまでは、自分がセリフをこなせるのか非常に不安でしたが、台本を読んで、すぐに不安は解消されました。歌の練習は刺激的でした。
- 1月はもう少し稽古時間があると良かった。

集計結果 3

※キャストのみ

	とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
日時	6	8	3	0	0
回数	4	8	5	0	0
内容	8	7	2	0	0

4 第二次稽古について

- 稽古期間中、本番に至るまでスタッフさんのサポートが厚く、役者に集中出来てとても有難かったです。
- 今までは自分が出ていないシーンは稽古場

集計結果 4

第二次稽古

	とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	6	8	3	0	0
日時	3	8	3	0	0
キャスト	6	9	2	0	0
スタッフ	3	5	6	0	0
キャスト	9	7	1	0	0
スタッフ	4	6	4	0	0

にいないこともあったが、今回は常に稽古を見学し、人の注意が聞けたり、場の雰囲気共有することで、自分が稽古を付けて頂く時の参考になりました。議事録を詳しく残していただいたことで、復習がしつかりできたこともよかったです。最後の週間のダメ出しラッシュはすごくよかったです。熱かったです。

●動きが入ったことでセリフをイメージしやすくなった。休みのおかげで切り替えができて助かった。

●客席から見た照明と美術が織りなす色づかいの美しさに感動。スタッフのさりげない気遣いと地道な作業、親切な対応に感謝。

●通し稽古が節目節目（本読み、立ち稽古、場当たり、ゲネプロ）で観劇できるので市民スタッフは遣り甲斐があります。

5-1 公演を終えて

集計結果 5-1

公演を終えて		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	満足度	9	6	2	0	0
スタッフ		6	5	3	0	0

●長期間支えてくださったスタッフの皆様と一緒に出演できたみんなに心から感謝します。お客様も世の中が大変な中、観に来てくださり、本当にありがたいです。カーテンコール、拍手がこんなに嬉しいのかと思いましたが、みんなと会えなくなるのが寂しかったです。

●まず、ここまでスタッフ、役者など役割が専門分化された環境で舞台を作るとは初めて



5-3 「市民と創造する演劇」の企画について

集計結果 5-3

公演を終えて		参加したい	知人に勧めたい	参加できない	参加しないし勧めない
キャスト	今後	16	0	1	0
スタッフ		12	2	0	0

●作品づくりを通して生まれるチーム感も好きですし、新しい人との出会いもあり、新たな挑戦もできて、自分にとってのワクワクが詰まっているので、ぜひまた参加したいです。

●この企画は続けて頂きたいです。ただ、私も含め毎回同じ顔ぶれになってしまうのはどうなのか、と思うこともあります。

●小中学生、高校生向けそして一般の演劇があるのなら、シニア向けもどうですか。市民劇のスケジュールがムリでも「芝居がしたいシニア」がいると思います。

●あまり少数精鋭となる演劇ではなく、ある程度の人数が参加できる演劇を続けて欲しい。

●市民劇が実施されていることは、知っています

で、驚くこともとても感動しました。今回ほど役者に集中して作品作りをしたことは無く、皆さんにおんぶにだっこで最後まで関わらせて頂いた印象が強いです。プロの俳優さん方にもとても目をかけていただき、様々なアドバイスを頂けて嬉しかったです。

●公演ももちろん楽しかったですが、それまでのプロセスがすごく充実していました。あっとい間でしたが、達成感がありました。大変な時期で先の見えない中でも、多くの方々に支えて頂き、我々演者は稽古に専念できたからこそだと思います。

●コロナウイルスの影響で、公演が出来るかどうか分からず不安な状況でしたが、その事は考えず、目の前の稽古をひたすら頑張っていた気がします。友人たちに沢山のチケットを購入してもらいましたが、半分以上がキャンセルになり心が折れましたが、幕が上がリ、会場の方々の姿を見た時は涙が出ました。沢山の方々に支えられていた事を実感しました。

●無事、公演ができてホッとしました。

●素敵な仲間達との出会いに恵まれ、とても豊かな時間をもって、嬉しかった。特性にあった様々な配慮のおかげで、心のゆとりが保てました。

●市民スタッフとして数回参加した中で、片付け作業の安全性向上と作業進行の計画性が重要だと感じました。

●大道具などを作るだけでなく稽古場に長く居たので作品に深く関わられたのがあり、達成感を多く感じました。

したが、なかなか参加するチャンスがありませんでした。気軽に参加できると良いと思います。

●プロの方々との作品制作ができることももちろん魅力的で勉強になりますし、いろんな世代の方々や交流しながら一緒に創っていくこの場所は自分自身大事に思っているので、これからも可能な限り参加していきたいです。

5-4 今後この企画を継続した方が良いと思いますか？

●地方は本格的な演劇を観たりプレイしたりする機会が中々ないので、是非継続していただきたいです。

●私のように劇団にも所属していない人にとっても、演劇を未経験の方々にとても演劇ができる貴重な企画なので、ぜひ続けて頂きたいです。演劇文化の発展にも繋がると思っています。

●普段、劇場へ足を運ばない方々が、身近なひとの参加で演劇を観に来るきっかけになり、プロの演劇も見たい！と繋がる可能性がある。数少ない貴重な体験ができる企画なので、5年後10年後と続いていき、多くの人が参加する大きな企画になっていくのを心から願っております。

●この市民劇を「育成」して欲しい。他の市民劇とはひと味違うと言わせた。

●毎年演出家は変わるが、劇場のほうから、参加者の目的の方向性を準備できるというのがいい。例えばオーディション前に「予備校」的な

5-2 この企画に参加する前と変わったと感じることはありますか？

「ある」を選んだ方は、その内容・理由をお答えください。

●また次回以降もオーディションを受けて、市民と創造する演劇に参加してみたいと思えた。

●正直なところ、市民劇に対するイメージはよくありませんでした。私の印象では、身内ネタや地元ネタばかりを盛り込む作品としてはアンバランスなもので、劇場が市民参加を目的に行う一般客には開かれていないものでした。今回、その印象は完全に逆転しました。オーディションで選ばれた俳優の皆さんはそれぞれに輝く才能の持ち主で尊敬出来る方々ばかりでしたし、小夏さんはじめ青☆組関係の方々は一切妥協せずに指導をしてくださりましたし、市民スタッフの皆さんも私では考えも及ばないほど様々な面で支えてくださり、何より制作スタッフの皆さんが市民劇を愛してくださっているということが伝わって、豊橋の市民劇はとて面白いプロジェクトなんだと感じられました。今回こうして参加出来て、とても嬉しかったです。

●全力で頑張る自分の姿とまだまだ伸びしろがあると感じられたこと。

●この企画に応募したときには、必ずお客さんを入れて作品を上演できると思ってましたが、それが当たり前ではないということ、今回の企画で学ぶことができました。

●自分がどこで何を求め、どうしたいか、時間制限があるか、考えるキッカケになりました。

●今まで参加した公演では、稽古は週1回で、

集計結果 5-2

公演を終えて		ある	ない
キャスト	変化	17	0
スタッフ		9	5

1か月前位から週3〜4回で本番か、もう少し少ない稽古で本番でした。毎日稽古で体力がもつかが一番心配でしたが、でも「やれるもんだな。私って結構大丈夫かも」と自信

が持てました。

●今回国語力があると評価して頂いた事が深く心に刺さっております。文章を仕事以外で書くことはなかなか無いのですが、時間があるときに何かしらの文章を書いてみようと思えました。

●ある場面でハネルを出す担当のキャストさんが出るタイミングを分かりずらそうにしてたのでGOサインを出すようにしたところ、とても助かっていると言っていただけで、自分がやった方がいいと思ったことはやってみたり必要か聞いたりしてみようと思うようになりました。

●正直演劇やストレート芝居に興味がありません。知り合いが出るとかの「お付き合ひ」がなければ観に行くことはなかったんです。ですがこの「ダツハイ・フランケンシュタイン」は、知り合いがいなくてもいろんな方に観てほしいと思えました。PLATの活動に参加するようになり、演劇や芝居に対する考え方も徐々に変わってきました。また参加し、私自身も豊橋で自分のできる引き出しを増やしていきたいです。

●今回字幕タブレットの実験に関わったことで、以前より視聴覚にハンディを持たれた方へ芸術を提供する方法について興味を深めることができました。

6 今後プラットに対する期待・要望

●演劇以外のジャンルでも市民と共同制作する企画を設ければ、また新たな人が劇場に足を運ぶようになって話が広がるのかなあと感じつつ、自分もやってみたいと思っています。

●市民劇の企画以外にもとても興味ある企画があるので、とても楽しいです。玄志向の物も一般の方が参加しやすいものもあり、これからは色々な情報を発信して欲しいと思います。

●市民と創造する朗読劇の企画を期待します。

●プラットは私にとって期待以上の存在です。スタッフの皆さんも魅力的な方ばかり。今のところ、これ以上の要望はありません。

●演劇に関する事(音響、演出、殺陣など)のワークショップがもっと有ってもいいと思います。

7 その他、意見・メッセージ

●早く元の日常に戻って、演劇や音楽、劇場を楽しめるように願っています。

●劇場という箱を支えているのは、人なんだと実感しました。

●コロナ禍により、落ち着きを取り戻すまでにはまだまだかかりそうですが、満席の劇場で観劇できる事を楽しみにしています。

●このような状況になり今後の活動も困難を伴うと思いますが文化芸術の灯が消えないように私たちの心の健康の為に職員の方々の健康に期待しております。早く豊橋に行ける日がきますように！





市民と創造する演劇 過去作品

「これまでの市民と創造する演劇」



2015



2015年3月14日(土)～15日(日)「全2回公演」穂の国とよはし芸術劇場PLAT主ホール

話シグルマ

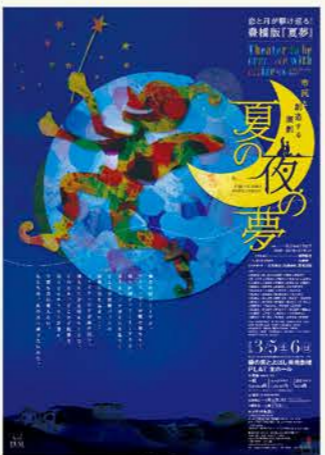
市民と創造する演劇
河合祥一郎のスケッチ群像劇

- ◆構成・演出……近藤芳正
- ◆脚本・演出助手……山田佳奈
- ◆出演・演出補……大谷幸広、小野寺する
- ◆美術……松岡泉
- ◆照明……伊藤孝行
- ◆音楽……島貫聡
- ◆映像……山田晋平
- ◆ステージング……小野寺修二
- ◆舞台監督……安田美知子
- ◆市民出演者……34名
- ◆市民スタッフ……3名

劇場が取り組む市民と創造する演劇の第一弾。名古屋出身の俳優・近藤芳正を構成・演出に迎え、車の中の狭い空間だからこ出来るコミュニケーションに焦点を当て、地方都市の車社会をモチーフに描いたオリジナル作品。

【主催】公益財団法人豊橋文化振興財団
【共催】豊橋市
平成26年度文化庁劇場音楽堂等活性化事業

2016



2016年3月5日(土)～6日(日)「全2回公演」穂の国とよはし芸術劇場PLAT主ホール

夏の夜の夢

市民と創造する演劇

- ◆作……Wシエイクスピア
- ◆構成・演出……扇田拓也
- ◆上演台本・演出助手 永妻優一
- ◆出演・演出補……大木実奈、橋本昭博
- ◆振付・出演・演出補……加藤紗希
- ◆音楽……伊藤雅子
- ◆美術……橋川寛子
- ◆照明……木藤歩
- ◆衣装……立木健司
- ◆舞台監督……阿部美千代、福谷昌洋
- ◆市民出演者……54名
- ◆市民スタッフ……9名

構成・演出に扇田拓也を迎え、総勢63名の市民と共に、シエイクスピア作品に挑んだ。傑作喜劇である「夏の夜の夢」に豊橋テイストを存分に盛り込み、大胆にアレンジした。出演者が入れ替わり立ち替わりライブで演奏し、作品に臨場感を加えた。

【主催】公益財団法人豊橋文化振興財団
【共催】豊橋市
平成27年度文化庁劇場音楽堂等活性化事業

2017



2017年3月4日(土)～5日(日)「全2回公演」穂の国とよはし芸術劇場PLATアトスペース

はしの子

市民と創造する演劇

- ◆作・演出・音楽……糸井幸之介
- ◆ドラマトウルク……木ノ下裕一
- ◆振付……木皮成
- ◆出演・演出補……キムコス、とみやまゆみ
- ◆舞台美術……土城研一
- ◆照明……富山貴之
- ◆音楽……佐藤こうじ
- ◆衣装……大岡舞
- ◆舞台監督……安田美知子
- ◆市民出演者……14名
- ◆市民スタッフ……16名

シリーズ初の2年プロジェクトの1年目。糸井幸之介を演出・音楽に迎え、豊橋オリジナルのちよと妙なミュージカル「妙シカル」を創作。アトスペースという小劇場空間で、2年目に向けて下地となる作品を制作した。豊橋にある実際の場所をモデルにした6曲を、出演者たちが歌と踊りを交えながら演じた。

【主催】公益財団法人豊橋文化振興財団
【共催】豊橋市
平成26年度文化庁劇場音楽堂等活性化事業

2018



2018年3月3日(土)～4日(日)「全2回公演」穂の国とよはし芸術劇場PLAT主ホール

とよはしの街の物語

市民と創造する演劇

- ◆作・演出・音楽……糸井幸之介
- ◆ドラマトウルク……木ノ下裕一
- ◆振付……キムコス
- ◆出演・演出補……とみやまゆみ
- ◆舞台美術……土城研一
- ◆照明……富山貴之
- ◆音楽……佐藤こうじ
- ◆衣装……大岡舞
- ◆舞台監督……安田美知子
- ◆市民出演者……11名
- ◆市民スタッフ……35名

2年プロジェクトの2年目。会場を主ホールに移し、1年目の倍以上の出演者とともにパワーアップした「とよはしの街の物語」上演した。本格的な舞台美術を舞台上に建て込み、エンディング曲を新たに追加することで、2年間の集大成となった。

【主催】公益財団法人豊橋文化振興財団
【共催】豊橋市
平成29年度文化庁劇場音楽堂等活性化事業

2019



2019年3月2日(土)～3日(日)「全2回公演」穂の国とよはし芸術劇場PLAT主ホール

リア王

市民と創造する演劇

- ◆作……Wシエイクスピア
- ◆脚本……橋口ミユ
- ◆上演台本・演出……橋本昭博
- ◆ドラマトウルク……長島 確
- ◆振付……白神ももこ
- ◆出演・演出補……大浦千佳、洪雄大
- ◆舞台美術・衣装……長藤麻貴
- ◆照明……木藤歩
- ◆音楽……岡田 悠
- ◆舞台監督……森山香緒梨
- ◆市民出演者……30名
- ◆市民スタッフ……12名

シエイクスピアの四大悲劇のひとつである「リア王」を上演台本・演出に橋本昭博を迎え、アリの世界を舞台にした悲喜劇と翻案し、アリの世界に逃げ込んだ「母」が「王」として即位する物語を加えた作品。観客を巻き込む演出や客席通路を使った美術など、客席全体をも包み込む賑やかな作品となった。

【主催】豊橋市／公益財団法人豊橋文化振興財団
平成30年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業